

日本プロレタリア文学集・28



レタリア文学集・28

---

# 宮本百合子集

日本プロレタリア文学集・28

宮本百合子集

定価 二八〇〇円

一九八八年三月三十日 初版©

発行者 山 本 功

発行所 株式会社 新日本出版社

〒100 東京都渋谷区千駄ヶ谷四の二五の六  
電話 (〇三) 四二二一八四〇二 (営業)  
(〇三) 四二二一九三三三 (編集)  
振替 東京 三一 一三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社  
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。  
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

日本プロレタリア文学集・28

宮本百合子集



## 目次

共同耕作	五
舗道	九
一九三二年の春	三二
だるまや百貨店	六六
刻々	八三
小祝の一家	一三七
聳	一四四
鏡餅	一四九
鈍・根・録	一五九
乳房	一六三

雑沓	一九五
海流	三三四
道づれ	三六四
猫車	二八八
築地河岸	三〇七
その年	三二六
日々の映り	三三三
杉垣	三四一
おもかげ	三五八
広場	三六八
三月の第四日曜	三六五
解説	西沢舜一……四〇九
発表年月日と掲載文献	……四三七

## 共同耕作

裏のくぬぎ、林のあつちをゴーゴーと二番の上りが通った。とめはいそいで自分のたべた飯茶碗を流しの小桶の中へつける、野良着へ手拭をしっかりとかりかぶって、土間から自転車をひき出した。

「もう行くか」

「ああ」

炉ぶちのむしろから、年はそうよってないのに腰のかがんだ親父の市次が立って来て、心配そうに云った。  
「——めったと皆の衆の前さ、目え立つようなところさツン出るでねえゾ、ええか！」

市次は組合へ入ってる癖に引こみ思案で、小作争議の応援になんぞにはどうしても出たがらない。俺ア年だで、皆の衆やってくるろと尻ごみするのだ。マンノーをくくりつ

けた自転車を往還まで押し出すと、とめはペダルへ片足かけヒラリと身軽くとびのった。

鶏がびっくりして、コッココッコとわきの草むらへかけ込む。朝の早い野良道をずつとずつと遠くなくても、自転車にのって行く元気なとめの、赤い前垂の紐の色が見えた。

×元村の深田と云えば、有名な強慾地主だ。去年の夏、明治二十年とかに入れた証文に物を云わせ、小作の権太郎の家の大げやきを伐らせちまったのも深田だ。権太郎の息子が組合員だし働きものでしっかりしている。息子のいた間は深田も手を出さなかつた。が、それが兵隊にとられたとなると、日本刀のぬき身をさげた暴力団を五人もひっぱって来てよぼよぼの権太郎を脅しつけた。そして、材木にすれば、証文の何倍というねうちの大げやきを根元から伐らせた。

同じ深田の小作人が、八人連名で小作料五割減の要求をつきつけた。おいそれと云うことなんかきく深田でないことはわかっている。豊年飢饉でこまるのは貴様らばかりか世帯のでかいだけ地主も困るんだ。土地をかしてやって田を作らしてやっているのに文句を云うな、と小作料五割まけるの要求書に名前を書いた一人一人の家へ手代がやって来て、おどしたりすかしたりした。



小作連は洒落しゃんや冗談で争議を起したんじゃない。すぐ全農東京府連の××村支部へ指導をもとめて来た。深田とのかけ合いは、組合のさしずでガンバッテ来たのだ。

おどしがきかないと分ると、深田は土地取上げで、やって来るという情報が入った。

そうとなれば、共同耕作で向って行くしかない。土地をとられて小作はどうして食って行けるのだ！

今日のようなとき弟の勝がいれば、真先にマンノー担いで勇ましく共同耕作にも出てくれる。その勝は、権太郎の息子といっしょにとられている。だからとめが、娘ながら甲斐甲斐しい野良姿で自転車をとばして行くところなのだ。×元村の組合員豊治の家まで行って見ると軒下に自転車かもう何台もたてかけてある。

「マア、とめちゃん！ よく来てくれたなあ」

やっぱり野良着のアヤがかけよって来て自転車からマンノーをとくのを手伝った。

「今日は、甚さのかみさんまで来てるヨ。女連まで出て来たんだから気強いもんだ！」

多勢、若い衆やおっさんの立ってる土間に入って行くと組合に入っていない甚さ（八人組の一人）のかみさんがその中に混り、瘠せた顔でマンノーを突き、じっと安さんの指

図をきいている。

「いいか、ちらばったり、自分勝手に動いたりしちゃいかねい。ガチャが来やがったからって、こっちがかたまつてれば、可恐おっかねえことはちつともねえんだ。女連は女連でかたまつて、真中さ入れ！ いいか！」

安さんのほかに青年部の人が七八人先へ立っていいよ三十人ばかりが田圃へくり出した。

とめはアヤと腕を組み、ゴム長靴を踏みしめて進んで行く。深田の竹藪にかかる頃、シトシト雨が降って来た。

「へえ、丁度いいわ！ 奴等オラ迂まって何も出来めえ」

田へ出る竹藪の角で、先頭に立ってる安さんが立ちどまって手を上げ、止レの合図をした。雨にぬれる竹藪の匂いをかきながら静かにかたまつて立っている。ところへ安さんが、すぐ戻って来て、

「よウし！ うまいぞー」

と叫んだ。

「スパイ弁護士が一人うろついてやがるだけだ！」

そら進め。今のうちだぞ。

ワッシヨ！ ワッシヨ！

忽ち田圃へ三十人がおどり込み、東の端から、マンノーを揃えてうらない始めた。

その時、茶色のレインコートを着たスパイ弁護士が深田

の竹藪の方からチョロリと姿を現した。直ぐ引きこんだ。

間もなくまた出て来て、田一枚をへだてた畦までやって来て様子を眺めていたが、共同耕作の威勢におじけて、何も云わず、外套の襟を立てて深田の邸の方へ消えちまった。

「畜生！ 手におえねえとってガチャ呼びやがるゾ！」

「ナニ。その間にやあらかたうなっっちゃウ！」

とめは、アヤ、甚のかみさん、自分という順に並んで、うなっている。

あと三分の一ばかりでうない上げるといふ時、ピケに立たしてあった安さんの十二になる弟が、ドーッと竹藪から駆けて来た。

「どうした！」

「来るよウ！ 十人ばっか今深田の裏で自転車おりてるぞウ」

「来やがったか、畜生！」

「口惜しい！」

甚さのかみさんまで汗といっしょにはりついた後れ毛をかき上げた。

「今ちっとだに」

「よし、みんな！」

安さんが泥べたの中に立って合図した。

「ガチャを田さ入れるな！ ひっこぬかれねえようにかたまれ。来てかまわねえ、うないつづける！」

口には云わないが合点とばかり、今までより一層氣勢をあげ、三十人が列を揃えてうないつづけた。

やって来た、やって来た。×元村の駐在と××町の警部補が先頭に立って、巻キャハンに頸紐といういでたちだ。猛烈な口論がはじまった。

「おい、やめんか！」

「馬鹿野郎！ やめられるかい！」

「やめろつたらやめんか！」

「そっちこそ邪魔だてやめろ！」

その間にもぐんぐん三十のマンノーは働いて共同耕作の偉力を示すばかりだ。いつの間にか、茶色レインコートの弁護士が畦へ出て来て、警部補とこそそそ耳うちしていたが、今度は、

「おい、ちょっと話があるから責任者が出来て来てくれ！」

誰がそんなヒツコヌキ策をくうもんか。

「用があるならそっちから云え！」

「どんな用だか知ってるぞ！」

「こら、そう騒がんで責任者を出せというのが分らん

か！」

「だからそこから云えと云ってるじゃないか！」

列全体が泥べとから動かず喚きながら、うなつている。

業を煮やした警部補が、サツと手を振って、合図すると一緒に七八人のガチャが、田へ一足、二足ふん<sup>ぶ</sup>込んで来た。

「入ったナ？」

「畜生！」

「うなつちやええ！」

「うなつちやええ！」

ゾックリ刃を揃えた三十本のマンノーが唸りを立てるような勢で振りあげられた。

「ソラ、うなつちやええ！」

ワツシヨ！ ワツシヨ！ 組合の連中は氣勢をあげてつめよせる。途端にパツと雨でゆるんだ泥べとがマンノーから飛んで、一人のガチャの頬べたについた。

「アッ！」

叫ぶと一緒にガチャは両手でしっかりその泥のはねたところを押え、真蒼になってよろめいた。仲間のガチャどもは一斉にピリツとして、顔色をかえた。やられたと思ってるんだ。

こつちからは、

うなつちやええ！

うなつちやええ！

女の声まで混って、マンノーの波がせめかけて来る。ガチャどもは、おじ気がついて、もう一步も足をとる泥べとの中を前進して来れない。さりとて、後がこわくて、振かえって田からあがることもようしない。

云い合わせたように、ガチャどもは色のかわった唇の震える顔を共同耕作の連中の方へ向けたまんま、一步一步、畦の方へと後じさり始めた。

可笑しいやら、小気味がいいやら！ 若いとめは体じゅう燃えるような気持だ。共同耕作の三十人は、小糠雨の中を躍るようにマンノーを振りかぶり、猶も、

うなつちやええ！

うなつちやええ！

ガチャどもを追いつめて行った。

## 舗 道

### 一

あっちこっちで帰り支度がはじまった。ビルディング内の生暖かい重い空気が急にしまりなくなつて、セカセカかき立てられた。

ミサ子は紫っぽい事務服を着てタイプライタアをうってゐる。かわり番こにワイシャツにチョッキ姿の社員が手洗いに出たり入ったりした。大声で、

「ああ、ありやダメさー！」

廊下の誰かと話しながら肩でドアを押し入って来る者もある。

ミサ子は、その中でわき目もふらずタイプライタアを打ちつづけた。もう一枚、短い手紙がある。それさえ打ちあ

げれば、一日の仕事はすむわけだ。

男の社員たちは、机の前にくいついて仲間に、

「おい、まだかい？」

と声をかけた。自分は洗つて来た手を拭きながら肩越しにのぞき込んだりしている。

しかし、ミサ子に、まだかい？ ときく者もいなかったし、退け時におくれまいとして熱心に打っている彼女のタイプライタアの前へ立ち止るものもない。彼女ばかりはいてもいけないでも問題にしない扱いだ。

ミサ子は馴れてる。これがこの××××××会社の気風なんだ。入社して来るとき、タイプピストは、どうか注意して余り用事以外の口を男の社員ときかないようにして下さい、と云われた。男の社員も、目立つようなことがあつてはいけませんから、その辺をどうぞ、と人事課から念を押されている。往来なんかではこれほどのことはないのだ。

急いで、やつともうあと半分というところまで打ったとき、

「ああ君、ちょっとこれをすまんが……」

モーニングを着た主任の馬島が、ミサ子のわきへ急ぎ足でやって来た。

「すまんが、これだけやっておいてくれたまえ」

拇指の腹をなめなめ、手をとめたミサ子の顔の横で厚い洋紙の頁をしらべた。調べ終ると、ミサ子は何とも返事しないのに、

「じゃ、ここへおいとくから……」

さっさと行ってしまった。チラリと、それを見たまま、ミサ子は小さい椅子の上へ坐り直し力を入れてタイププライアアを打ちつづけた。

女事務員だけが何ぞというたらダラダラ居残りをさせられる。しかも、それを断れないような工合になっている。男の社員と女の事務員との間に形式的な格の違いをつけ、事務以外の口を利いてはいけないことにしてあるのなど、なかなか会社のずるいところだ。

いつの間にか、女事務員のことについて口を出したりするのは、社員として見てもいいことじゃないという気風がしみ込んでいる。どの部だって女事務員は一人か二人しかいないから、どうしても損な役割を押しつけられてしまうのだ――。

四時半になるのを待ちかねてドタドタみんなが帰ってしまった。埃っぽい、机のつまった室内を照して天井の電燈がついた。

ミサ子は、洗面所へ行った。ふんだんに水をつかってゆ

っくりと手を洗ったり、髪をかきあげたりしたら、少し気分がさっぱりした。居のこりときまったら、いそいだつてつまらなかつた。××〇〇会社は四時半から後の残業は七時以後からでなければ割増しがつかなかつた。従つて、ちよいちよ居残りさせられても大抵のときはタダで、使われる者の損になるばかりだ。

自動車の警笛。メガホーンで何か叫んでいるばやけた人間の声。丸の内のアスファルト道路から撥ねかえる夕方の騒音が、人気ない室へつたわつて来る。

ミサ子は左手を握つて暫く右の肩をたたいてから、再びタイププライアアをうちはじめた。

給仕の牧田が茶碗をあつめにやつて来た。

「おや、いたんですか!」

「……あつちに誰かのこつてる?」

「柳さんがいますヨ」

給仕が出て行って暫く経つと、キチンとしまつていないドアを少しあけて誰かが覗いた。ミサ子がわざと知らん顔をしてしていると、今度は全体ドアをあけ、庶務の沖本がのっそり入つて来た。

「……御精が出来ますな……ひとりですか?」

じろじろミサ子のまわりや誰もいないたくさんの机の方

を見まわした。警部あがりの沖本を好いてる者は一人もいなかった。「穴銭」という綽名がついている。頭に穴銭みたいなハゲが一つあった。警部をしていた時分、強盗にかみつかれた跡だという話だが、女事務員たちは、「うそー きつと神さんにやられたんだわよ」と嫌悪をこめて笑った。

神さんだつて喰いつかれそうに憎々しい五十男だ。

「あんた、一昨日だったかも随分おそかったじゃないか……うん？」

ミサ子はむっとして、

「これ見て下さい」

おつつけられた支店長宛の書類を眼でさした。

「四時半になってこれだけ出たんです……こんなに使われて病氣んでもなつたらどうしてくれるんでしょ」

「ハハハハ……そんなこと会社の知つたことじゃないヨ。ハハハハ」

金でワクをはめた前歯を出して意地わるく笑いながら沖本は出て行つた。

軽い靴音をたてて柳がやって来た。

「どのくらいですむ？」

「さあ……もう一時間……そっちは？」

「八時まではどうしてもやっちゃうわ。一緒に何かたべて帰らない？ 帰ってから火なんぞおこしていられないもん」

「私なんか、もういい加減ベコベコだわ」

夜の八時すぎて、庶務へ残業届けを出しミサ子と柳とはやと宏荘な××ビルディングを出た。

「いやな奴、あの穴銭！ 自分で来て見てる癖に、課から部から、姓名まで云わせるんだもの！」

「そういう奴なのよ。こっちからわざわざ届けなけりゃ見ていたつてつけないで置くんだから」

それから「モーリ」へ行つてミサ子は支那ソバを、柳はカレーライスをたべた。

一一

市ヶ谷で省線を降りると、ミサ子はガソリン店の角を、牛込の方へ登つて行つた。

一番姉の文字が三人の子持ちになつて細工町に住んでゐる。急に相談したいことがあると、速達が来たのだ。

琴曲教授の看板について石敷の小路に入り、立てつけの悪い門をあげ格子をガタガタやっていると、真暗な玄関へ

サツと茶の間からの灯がさした。

「だあれ？」

「小母ちゃんよ」

「母さん！ 小母ちゃんが来たヨ」

九つの順三の声がした。

「マア、おそいのね、今かえり？」

割烹前掛で手を拭きながら、文字が台所から出て来て格子の懸金をはずした。

「さあ、どうぞ」

文字が長火鉢の前へ坐ると、九つに五つに三つという子供たちがぞろりと母親にたかつて、凝っとミサ子の方を眺めた。

「どうしたの、順三、小母さんに今日はしたの？」

順三は、体をくんねり母親にもたらし笑ってばかりい

る。

「義兄さんは？」ミサ子が訊いた。

「お風呂から床屋へまわってる筈よ……直き帰るわ」

「お変りなし？」

「相変らず——お友達やなんかに頼んであるらしいんだけれど、義兄さんのようなのは却って駄目ね。ズブの学校出ならこれでまた、就職口があるらしいんだけれど……」

太田は高商出で、十年余××物産に勤めていた。始めは池内成三という××の大番頭のひきで将来見込みのありそうな鉱山部詰めだった。それがだんだん中軸から遠いところへと勤務を移され、昨年の秋不況と一緒にとうとうくびになった。

太田の亡父が知事で、二三軒の小さい貸家と今住んでいる地所家屋をのこして行つた。それで、どうやらやつていく訳だ。

文字は、

「私この頃つくづくミサちゃんが羨しいわ」

と、しんかららしく云つた。

「せめてお小遣いでも自分の力でとれたらどんなにいいでしょうね」

わきに遊んでる子供たちに聞えないようにしながら文字

は小声で、

「先月家賃のとれたのはたった一軒よ。お話にも何にもないやしない！」

ミサ子は長火鉢の灰をかきながら、姉夫婦の生活に同情と歯痒さを感じた。結婚当時は、僅かながら不動産もあるし、勤め先もいしと樂觀していたのだろう。けれど、世の中は決して一つどころに止つてはいないのだ。

「こないだちょっとわけがあつて価格評価をして貰つて、私、全く先々どうなるんだろうと思つたわ。地面や家作なんてもう何の頼りにもなりやしない。価値がないのね」  
 姉の相談は、ミサ子に同居してくれないかと云うのだつた。

「恥かしいこつたけれど、全く法がえしがつかないの。だからミサちゃんの都合さえよかつたら、よそを肥やすより、うちをすけて貰えまいかしらと思つて——」

「ミサ子が急場の返事に困つて黙つてると、

「図々しすぎる？」

文字は微に顔を赧らめながら極りわるそうに笑つた。

「そんなこと決してないわよ。……でも義兄さん承知なの？」

「承知するもしないもないじゃありませんか——。ミサちゃんだつて楽じゃないでしょう？ 自炊なんて簡単なようでも面倒くさいもの……家にいりゃ台所へ立たせるようなこととはしなくてよ」

ミサ子が××〇〇会社からとつている月給は英文、邦文両方やつて三十八円だつた。そこから天引食券代五円、クラブ費親睦費とさしひかれる。間代を十円払うと、あと食べてエスペラントの月謝を出し、たまに映画でも見るのが

やつとだつた。

何時になつても家へさえかえれば、炊いた御飯があるというだけでも、のんきになれる。だが——

「どうしようかしら……」

ミサ子は首を振り振り返事に迷つた。実のところ、ミサ子は姉夫婦のやつてるような暮しの中へ引ずり込まれるのが厭だつた。

ハッキリ返事しないでいるうちに、

「ヤア」

と、太田がドテラに羽織という姿で帰つて来た。

濃い眉と眉との間をテラテラ光らせ、剃りたての顎、長めな鼻の下へ小さく髭を立ててる。ミサ子が知つている限りの太田は、いつも同じ片づいた表情で、

「——どうです？ この頃は」

と長火鉢の前へ座つた。

「相変らず……」

「どうだね、一つミサ子さんの会社へでも雇つて貰えまいかね」

嘘とも本当とも分らない表情でそう云いながら太田は朝日に火をつけた。

「私みたいなへボからじゃだめよ」



「いくらでもいいよ。ほんとに！ そう云ってみんなに頼むんだが、これでいざとなるとそれも行かないものと見えてなかなかないね」

一種の自負ありげに云うのがミサ子には気の毒だった。

「……二年は辛いわね、でも……」

「ああ。しかし、いろんな事業はやっていきますよ。ボール・ベアリング、鉄の円い玉だが、カケス・ボタンやいろんなものにつかって銀ぐらいねうちのあるもの、あれの製造工場をやっているし……」

「儲かります？」

わきで紅茶をいれながら文子が、

「それどころじゃないのヨー」

やりきれないという目顔をして見せた。

「今のところは、とてもそこまでは行きませんな。何しろ得意がああいうものはきまってるから、そこへ割込むのが大変だ」

ミサ子は、太田が十年余も大ブルジョア企業の中に働いていたのにまだそんなことを考えてるのかと不思議な気がした。ミサ子の浅い知識で理解したって今の不況は生産がなくて不況なんじゃない。在りあまって市場がないから不況なのだ。

「小資本じゃ駄目なんでしょう？」

「駄目だね。……だがこんどは一つトーキー映画会社をやりますよ、資本百五十万円の。——これは確にいいね！」

パラマウントが、天然色写真で同時にトーキーの何とかという最新撮影機を、元同じ××物産で今は蓄音器会社に関係のある友人へ特別契約でよこした。日本で、天然色トーキー映画フィルムをつくる。それが世界へ出て儲けは確実だというのだ。

余り話が簡単なんでミサ子は思わず……

「……だって、俳優を見つけたりするの大変でしょう？」

「ナニ、そんなことはどうでもなる」

「だって……スタアを引っこめくのに大した金でしょう？」

それにいい監督だって買って来なくちゃならないし……」

「いや、それは何とかあります。十万円もする機械が何しろタダ手に入るんだから……」

ミサ子は義兄の云うことをきいているうちに鳩尾ひなぢの辺がつめたくなるように感じた。才能のない、どこか足りなくはないかとさえ思われる太田は、失業で焦あせれば焦るほど××が巨大な資本の力で、儲けるのを見て来た癖で可能性のない儲妄想にかかっている。